

カール・ビューラーと記号論 理論モデルの成立史からの解釈

山 取 清

言語学史の研究者として知られるケルナー (Konrad Koerner) は、価値ある業績のほとんどが戦後の主要な学問世界から置き去りにされ、亡命の地アメリカで不遇の晩年を送ったカール・ビューラー (Karl Bühler 1879~1963) を悼んでいる¹。本稿の主題は、最近数年来ようやく照明が当てられ始めたこのビューラーの業績に記号論の立場から着目し、彼の理論形成の過程を文献で追いながら解釈を進めていくことである。

1

「科学的にものを考えることができるようになって以来、私の興味は言語という現象をめぐる²」と、『言語理論』(1934)の序言で述懐しているように、医学者・心理学者として出発した初期の頃を含めて、ビューラーが公表した論文の多くは言語とのかかわりを持っている。初期の代表的な2論文『思考過程の心理学に関する諸事実と問題』³(1907~1908)、『規範心理学の立場からみた言語の理解について』⁴(1909)は、ヴェルツブルク時代に同僚の心理学者キュルペ (Oswald Külpe) たちとの交流を通して執筆されたものであるが、既にこれらからも言語考察におけるビューラーの基本的な態度を見ることができる。

『諸事実と問題』は「思考について」(Über Gedanken)、「思考の脈絡

について」(Über Gedankenzusammenhänge), 「思考の記憶について」(Über Gedankenerinnerungen) の3部から構成され, ビューラーはこの論文において, 従来の心理学者や論理学者, 特にヴント (Wilhelm Wundt), エールトマン (Benno Erdmann) に代表される思考の要素主義的な解釈を批判的な立場から考察することを本来意図していた。概念を一個の表象と見なすヴントの定義では, その表象が与えられることによって一連の連合系路が開示され, それらを通じて連合された表象群の意識が思考であった。一方, 心理内に蓄えられた表象への素因 (Dispositionen) を重要視するエールトマンは, 代表となる1個の表象が与えられることによって刺激された素因, すなわち表象間の関係の総計, 言い替えればある種の体系の意識が思考であると述べた。両者には確かに表象の集合かそれとも表象間の関係に注目するかの違いこそあったが, いわゆる「直観」(Anschauungen) によって与えられる感覚的表象 (sinnliche Vorstellungen) の意識がそのまま思考の本質とも結び付けて定義されているところに共通点が見られる。それに対して思考体験の本質的な部分に感覚的表象以外の特有の契機を仮定し, 実験でそれらを立証しようと試みたのが, ビューラーを始めとするヴェルツブルク学派の若い研究者たちであった。

この実験を行うに当たって彼が取った方法は次のとおりである。まず被験者 (実験データの精密度を保つために熟達した心理学者として同僚キュルベたちの協力を得た) と実験者 (ビューラー本人) を分け, 実験者が被験者に短い命題 (例えばニーチェの作品やハイゼの格言辞典から引用した文) を聞かせ, その後に「理解できますか」とか「それは正しいですか」などの質問を行う。それに対し被験者は「ハイ」と「イエ」の答えとともにその間の思考過程を実験者に報告する。実験者はこうして得られた解答を記録し, そこから法則性を読み取っていくのである⁵。

この実験の結果を基に, ビューラーは「規則意識」(Regelbewußtsein),

「関係意識」(Beziehungsbewußtsein)、「志向」(Intention)という3種類の思考の型を仮定している⁶。それによると「規則意識」は意識内での対象の在り方と深く係っている。つまり意識内での対象の在り方は、一方では感覚的直観としての「映像」(Bild)、そして他方ではフッサール(Edmund Husserl)が「カテゴリー的直観」(kategoriale Anschauung)と呼ぶ客観的・形式的なものに区別されるからである。ビューラーがここで「規則意識」を説明する例として挙げているものとは、数学の証明に用いられる公式、機械の構造や建築物の見取り図、思考が文に移される途上の意識状態などであり、一種の法則的なものに近いようにも思われるが、それよりもむしろ類推的思考や記憶などにおいて顕在化する心理的概念と見なす方がより正確であろう。第2の型「関係意識」が認められるのは、与えられた命題の理解がその中の諸事項間の何らかの関係を意識することと結び付いている場合であるが、これは性質上自律性があまり高くないために、その意識内容は「規則意識」ほど独立したものではない。しかし様々に分岐しながらもまとまりを保った意識の連続体が創り出されるのは、この「関係意識」のおかげである。第3の型「志向」はフッサールの述べた「純粹指示行為」(rein signitiver Akt)の定義を基礎にし、ここでは思念されるもの(das, was gemeint wird)ではなく、思念自体(das Meinen selbst)、つまり対象との関係そのものが思考の契機として抽象される。ビューラーはこれら三つの思考の契機を仮定した上で、さらにその一方で思考体験を二つの集合に区分している。この区分もフッサールの定義に従っており、それはフッサールが「充実」(Erfüllung)という語で包括している意識内容を伴う思考とそれを欠いた思考とに分けることを意味する。これは思考されたものが「何と定義されたか」(Wasbestimmtheiten)ということ、すなわち思念されるものの意識内での在り方と、「志向」あるいは思念自体、すなわち思考対象と自我(Ich)との関係が区別されるからであるが、もちろんこれら二つの部分への分割は抽象的であって、一方は

他方なしには存在しえない。

思考体験の分析をテーマにした『諸事実と問題』は、その内容から一般にヴェルツブルク学派の思考心理学を代表する業績と評価されているが、それに続く『言語の理解について』では、『諸事実と問題』で考察された諸概念が一層具体的に言語の問題との関連を前面に出して論じられているのが分かる。その中でもビューラーの理論形成上注目に値するのは、次に挙げる二つの引用文に見られる観点であろう。

「生きた発話において聞き手は、ある時は光学的かつ音響的に、またある時にはただ音響的にのみ知覚できる話し手を前にし、その発話を „表現運動“ (Ausdrucksbewegung) として解釈することができる。発話はそのようなものとしてしばしば他の表現運動 (例えば身振り) と結び付いて、聞き手に話し手の中で今起きていることについての開示を与えてくれる。話し手が今しゃべっていること、あるいは今これをしゃべっているという事実が既にそうであるが、その発話の持つあらゆる特殊性が聞き手をそのような解釈へと促すのである。我々はそれらも、またそれらが狭い意味での理解に及ぼす影響も除外することにしよう。すなわちフッサールの術語を用いるならば、我々は „告知“ (Kundgabe) の理解ではなく、聞こえてくるものが含んでいる „言辞“ (Äußerung) あるいは „発言“ (Ausdruck) の理解のみを考察することにしよう。」⁷

「我々が理解に際して多くのものを補い、多くの不確定なものを特定しているという事実は、簡単に証明できる。例えば „Heiße Bitte, kalter Dank“ . という文の理解に際しては、二つの分節の間にある種の関係が意識される。そして更に深く把握するならば、そこには普通は期待されるはずの行動とのある種の対立が、少なくともまだその上に存在するかもしれないのである。というのも二つの文肢を並置することには、聞き

手にとってはただ一般に関係を結ぶという不特定の要求でしかないからである。これは接続詞省略による並置という同じ手段が、全く異なる事例にも適用されることから最も明らかである。最初の例に続くそれと似た文を比較して欲しい：„Neuer Arzt, neuer Kirchhof“, „Lange Haare, kurzer Sinn“。ここで考えられる関係はいずれの例でも異なっており、それらの関係は、聞き手が上文で問題にされている事実に関する知識を補足することによって成り立つものである。言語がこのような表現のすき間を示すのは、引用した例のように単純明解さを目指すのに役立つ例ばかりではなく、全く一般的な現象である。」⁸

最初の引用文は言語の二重機能（Doppelfunktion）を指摘した部分である。引用文中にもあるように、これは明らかにフッサールの『論理学研究』第2巻（1901）の表現と意味に関する章から多くの着想を得ているが、言語学の領域の業績としては、この引用個所の直後に挙げているエルトマン（Karl Otto Erdmann）の著書『語の意味』⁹（1900）で示された伝達機能からの語の意味分析、つまり語の意味を「表象的価値」（Vorstellungswert）と「感情的価値」（Gefühlswert）に分けてとらえようという試みからの影響が強く認められる。

また第2の引用文で述べられるのは、ビューラーが「アハ体験」¹⁰（das Aha-Erlebnis）と呼ぶ現象の説明である。この概念は、言葉による実際の表現を通して聞き手の心理に直接受容された思考部分（die durch Erfassung des sprachlichen Ausgedrückten im Hörer direkt angeregten, rezipierten Bestandteile des Gedankens）が、聞き手が主体的に産出した思考部分（die hinzuergänzten, produzierten Bestandteile des Gedankens）に補われることによって初めて一貫した思考になることを主張するものであり、このような見方には間主体的観点背景にするビューラーの言語理解の特徴の一つがよく表れている。

ここに紹介した二つの論文が物語るように、初期のビューラーの研究は一連の心理学研究の成果であり、そのためにいわゆる言語学の領域における後年の彼の業績との関係が一見希薄な印象がある。しかしそれらの内容を実際に検討すると、彼独特の言語への関心と斬新な見方が随所に顔をのぞかせている。例えば最初の論文『諸事実と問題』における思考過程の分析で得られた認識、つまり思考と呼ばれる体験が実質的・感覚的な部分と形式的な部分に分離できるという見解は、従来の言語学で支配的であった二元論的思想からの脱却を可能にし、精神面と物理面（言語における内容と実質）の間に密接なつながりを仮定する従来の要素主義的・精神物理学的言語観の限界と記号論的考察への展望がそれによって示された。またそこで得られた諸概念に関しては、「規則意識」、「関係意識」、「志向」という三つの思考の契機あるいは「アハー体験」の指摘、「告知」と「言辞」の区別に見られるように、後に発表されるビューラーの主著『言語理論』の内容との直接の関連性も見いだせる。「規則意識」については、後に彼自身も振り返っていることであるが、『諸事実と問題』でカント（Immanuel Kant）の「図式」（Schēma）に関する見解を引用しながら説明している構文論上の問題との関連がまず浮かんでくる¹¹。第2の型「関係意識」も「規則意識」と同様に構文論の問題とかかわるが、この型には特に『言語理論』に見られる「合成語」（Kompositum）、「隠喩」（Metapher）、「文接合」（Satzgefüge）などの扱いにその後の発展を認めることができるだろう¹²。また第3の型「志向」も、言語現象を人間の「行為」（Akt）の観点からとらえるビューラーの理論を特徴付ける見解の一つの背景を成している。さらに言語における「告知」と「言辞」という二つの機能の区別、そして「アハー体験」と名付けられた思考過程におけるある種の関係の意識化と談話におけるその役割の指摘は、後で詳しく述べることになるが、一方ではもちろん有名な「オルガノンモデル」（das Organonmodell）による記号機能の図式化と、他方ではいわゆる「空位」（Leerstellen）の問題と

密接に関連した彼独特の「場」(Feld)の理論へ発展して行くのである。

このように初期の業績が言語理論研究の上でもビューラーの理解にとって欠くことのできない資料であることは疑う余地がない。その意味では、これらは後年の業績と共に今後さらに詳細な分析と検討を必要とすることになるものと思われる。

2

ビューラーは、1906年にキュルベの主宰するヴュルツブルクの心理学研究所に助手として採用されたのを皮切りに、9～13年にはボン、13～18年ミュンヘン、18～22年ドレーズデン、そして22～38年ウィーンと移り住んでいるが、彼の研究業績全般を概観すると各時期ごとにある種の傾向が読み取れる。見方を変えれば、ビューラーにおけるこのような研究傾向の推移には、人間関係を中心とするその都度の彼を取り巻く環境の変遷も大きく作用しているように思われる。例えば1915年にキュルベが死去するまでのビューラーの研究は、常にキュルベの影響を色濃く反映しており、いわゆる思考心理学の枠内に留まるものであったが、それと前後するシャルロッテ(Charlotte Bühler, geb. Majakowski 1893～1974)との結婚と長女の誕生をきっかけに、発達心理学への関心が彼を強くとらえたようである。またミュンヘン時代とはほぼ重なる第一次大戦中の軍医としての体験なども相まって、『子供の精神発達』³(1918)という優れた成果が生み出された。ミュンヘン時代には言語研究の領域に一見注目すべき業績がないようであるが、この時期に積み上げられた経験と知識が、言語理論形成の上でも次の段階への重要な背景を成すことは間違いない。1919年に発表された『新しい文理論の批判的吟味』はそれを物語る論文であるが、次の引用文に示されるように、ここにはビューラーが記号論を形成していく上で重要な二つの問題が含まれている。

「子供の一方の手には握って確かめることのできる物を与え、それと同時にもう一方の手の中にはこれに対する触感記号 (Tastzeichen) が押される。……これを何度も繰り返すことによって、比較的容易に語という記号複合体の幾つかを幾つかの対象に対応する触感記号に連合させ、記号を与えるだけで一方の手に当該の対象を期待させることができるようになる。」¹⁴

「叙述 (Darstellung) の手段と仕方には多くのものがあるが、言語はその中で最も普遍的で重要である。だがその秩序化 (Zuordnung) は観念的關係 (ein ideelles Verhältnis) であり、決して現実の脈絡から導き出されることはない。したがって告知 (Kundgabe) ・喚起 (Auslösung) しか知らない言語理論は、命題文においてはすべて必然的に機能しないことになる。」¹⁵

最初の引用は、有名なヘレン・ケラー (Helen Keller) が三重の障害を背負いながら、それを克服してどのように言語を修得していったかを物語る挿話の一節である。ビューラーはここで「記号」(Zeichen) という語を数回用いているが、これらは従来の論文で使われた脈絡とは幾分異なっている。例えば前節で引用した初期の論文『言語の理解について』は、「言語の理解のいずれも言語記号 (Sprachzeichen) の知覚を前提とする」という表現で始められるが、「正常な感覚を有する人間にとって最も重要なものは、読書の際の筆記されたあるいは印刷された光学的言語記号の知覚と語られた言語の音響的知覚である」¹⁶ と続けられており、この場合の「言語記号」とは文字で表記された語と完全に同義に使われていることが分かる。しかもそこでは語とそれが表す意味の関連には全く触れられずに、音調・強勢・時間・音質などの諸要因から成立する語が、どのようにして一つの「語像」(Wortbild) として意識内に生じるのかを確認するのが目的

であった。一方で意味の問題は発話の理解という水準でのみとらえられるために、「告知」と「言辞」の二重機能として発話の意義が抽象的に分離されているにもかかわらず、記号論上最も重要な視点がこの論文ではまだ明らかに欠けていた。それに対して『批判的吟味』では、引用に見られるように、「記号」をアルファベットのような音声の代わりをする単なる表音記号の意味として見るばかりでなく、むしろ「記号」と何らかの「対象」との関係に着眼点を移そうとする姿勢がコンテクストからうかがえること、「叙述」の「秩序化」を観念的關係と定義したこと、そして言語の機能の区分を、「話し手」・「聞き手」・「事態」との関連から三重の機能という見方に修正したこと、これら三つの見方に記号論形成への萌芽を確認することができるのである。

ただこの論文を見るかぎりでは、ビューラーがこの時点で既に「記号」のいわゆる記号論的意味を完全に認識していたと言えるに十分な根拠は見いだせないし、また「記号」と言語の三重の機能との関連性についての言及も行ってはいない。したがってドレーズデン時代に執筆されたこの論文には、ヴェルツブルク・ボン・ミュンヘン時代に蓄積された思考心理学・発達心理学における研究を、本格的な記号論へと橋渡しする過渡的性格が表れていると位置付けることができる。その意味で、ヴィーンに移って以後最初の論文『言語の叙述の概念について』（1923）は、小論文ながら非常に画期的な内容を持つ。

「あらゆる種類の出来事や活動も記号として機能しうることを忘れるべきではない。かつて人間にとって世界全体がモノに似た記号で満ちていたように、文化生活全体にも象徴的行動が浸透していた。そして言語はその中心にあって不可分の意味論的機能に関与していたが、今日でもなおその関与の痕跡を身につけている。だがそれを度外視しても言語の意義には依然として三つの次元が残存している。言語記号が意味の担い手

でありうる三つの方向，すなわち聞き手・話し手，そして対象あるいは事態に対する方向である。」¹⁷

ビューラーはこの論文の冒頭で、いわゆる「記号」の代理機能 (stellvertretende Funktion) の起源はアニミズム (Animismus) にあると仮定している。それによると、生活環境の森羅万象を解釈し、それらにある種の意味を持たせるという行為は、人間文化における意味論の局面の開始を告げるものであり、人間精神による世界の記号化の営みと「記号」の神秘的機能への呪縛は、そのようなアニミズム的発端にまで遡ることができる」と説明される。彼はこのような発生論的仮説に基づいて文化生活における「記号」の発達と役割について述べた上で、そこに「言語記号」の持つ意味論的諸機能の分類という現象学的な考察を加える。先に引用した『批判的吟味』では、言語の記号的性質と諸機能の問題は別個に指摘されているだけで、それら相互の関連性には全く言及されていなかった。しかしこの論文では、記号概念の明示化に伴って言語の諸機能も記号論の視点から解釈しようとしているのが分かる。例えば、従来の論文では、フッサールやエールトマンの定義に結び付けてただ単に発話の持つ具体的な機能として「告知」・「喚起」・「叙述」という分類を示したにすぎなかったが、それらの諸機能を「象徴」(Symbol)・「徴候」(Symptom)・「秩序記号」(Ordnungszeichen)・「徴証」(Anzeichen)などの術語でも言い表し、記号論的観点とのつながりを明示化していることにも理論形成の上での進歩が見られる。また『批判的吟味』では、構文論の問題に関してパウエル (Hermann Paul) およびヴントの要素主義心理学による文の解釈を批判し、フッサールに基づく機能的定義が主張されているが、次に紹介するように、『叙述の概念について』ではその面でも一步前進した解釈を行っている。

「文の意義 (Satzsinn) という空虚な構文論的図式 (das leere syntaktische Schema) が、語によって名指されたものに充実され (erfüllt wird), あるいは名指されたもので事態が鑄造される (zur Ausprägung gebracht wird). ただし、これらをあまりに厳密にまた機械的に考えすぎたり、聞き手の活動性を過少に評価してはいけない。」¹⁸

ここでは、第1節で取り上げた論文『諸事実と問題』で言及した「規則意識」と「アハー体験」並びにそれらとカントの「図式」との関連性の指摘を思い出して欲しい。もちろん、その当時としてはビューラー自身がこれらを思考心理学における実験結果としてしか意識していなかったために、そこに記号論との関連性を具体的に示すような言葉は見つからないが、上記の引用個所にそこでの認識が生かされていることは明らかである。ただこの論文では、「記号」と「機能」との間に確認された関連性が、構文論的図式にまではまだ適用されていないために、完全に一貫した統一性を欠いている印象は拭えない。次に挙げる『言語の象徴論』(1928)はビューラーの記号論の完成にとって重要な意味を持つ論文である。

「音楽における叙述の課題、すなわち任意の楽曲を象徴記号を用いて叙述するという要求は、そのような叙述の場 (Darstellungsfelder) が限らない配列の可能性に関与していなければ、全くあるいはこれほど簡単には実現出来ない。……我々にとっては、叙述に際していずれにせよそのような場が利用できるという単純な認識で十分である。言語にも叙述の場があり、それが利用されている。一つではなく複数である。私は言語の叙述の場を第1・第2・第3の場に区別する。」¹⁹

この論文はわずか5ページの小論文であるが、『言語理論』の内容構成にとって極めて大きな意義を持っている。というのも『言語理論』には「言語

の叙述の機能」という副題が付いており、この「叙述」の説明には、『言語の象徴論』で初めて詳しく定義された「場」の概念が重要な役割を演じているからである。つまり「叙述」の手段としての言語は記号論的に「象徴」として機能するが、ビューラーの説明では、このような「記号」の「象徴的価値」(Symbolwert)は「場」との相関から生み出される。引用文中にあるように、彼は「場」の概念を三つの「叙述の場」に分類している。それによると、第1の「叙述の場」は擬態語や擬声語をはじめとするいわゆる「音声描写」(Lautmalerei)の領域とかかわり、人間の発声器管はそれによって母音や子音などの限られた範囲の音的素材を駆使して、自然界を出来るだけ忠実に描き出そうとする。したがって第1の「叙述の場」とは、そのような「模写」(Abbildung)の可能性の限界を示す「場」でもある。第2の「叙述の場」は、話し手と聞き手、そして具体的な発言の場面という両者が共有する「知覚の状況」(Wahrnehmungssituation)から発展する。例えば最も具体的な場面では、話し手は指示のような身振りを用いて聞き手に自分の意思を伝達できるが、さらに高度な段階では、そのような伝達は話し手と聞き手が例えば「ここで、今、私が」(Hier, Jetzt, Ich)のような空間的・時間的な座標などの共通の「内的直観」(die innere Anschauung)を有していることによって成立する。もちろん、概念的な内容を持つ一般的な語の理解にもこのような「内的直観」が関与しているわけであり、ビューラーはそれらを第2の「叙述の場」としてまとめているのである。そして第3の「叙述の場」には、『叙述の概念について』で「空虚な構文論的図式」として触れられていた構文論的図式の総体が当てられる。つまりそのような図式を「場」の概念の中に含めることによって、伝統的文法では語彙論と構文論として扱われてきた分野を記号論的体系の内に統一することができるようになったのである。

このように『批判的吟味』、『叙述の概念について』、『言語の象徴論』の3論文の対照からは、ビューラーにおける記号論の着想と公式化の軌跡が

明確になってくる。そしてそこからは、ビューラーが記号論を本質的に意識し始めたのがおそらく1920年頃であり、その後10年余りの期間を費して徐々に整えられていった様子を知ることができるが、その推論を裏付け、さらにそこに展開される理論の思想的背景を集約して示してくれる著が『心理学の危機』（1927）であろう。タイトルが示すとおり、この著は言語学のテーマを扱ったものではない。しかし精神科学史の方面からのビューラー研究には欠かせない資料である。『心理学の危機』は本文約200ページの著書なので、その内容の詳細をここで紹介することはできないが、次に挙げる引用は、その中で示されたビューラー自身による記号論の三つの基本的観点の要約個所である。

「I. 真の社会生活が存在するところには、常に社会の成員の意味ある行動の相互統御 (gegenseitige Steuerung) がなければならない。統御の座標が共通の知覚状況に与えられていない場合、統御はより高度な秩序、すなわち特殊な意味論的装置 (semantische Einrichtung) によって伝達されなければならない。

これは動物と人間における意味論 (Semantik) の原点である。

II. 社会的行為に関与する個体が、自己の欲求や気持ちを相互統御の中で認めさせようとする時には、情報のやり取り (Kundgabe und Kundnahme) が行われなければならない。

これは意味論の領域を体験心理学 (Erlebnispsychologie) の観点に開き、それを要求する。私はここに第3の公理を加える。

III. 表現記号は、対象や事態に秩序づけられることによって新しい意味の次元を獲得する。これによって、あるものが他のあるものによって表されるというコミュニケーションの手段としてのそれらの機能は限りなく高まる。」²⁰

ここにはビューラーの記号論を特徴付ける上で鍵となる表現が幾つか見られるが、その内で特に注目すべきものとして「意味論」と「統御」という二つの術語について述べておきたい。ビューラーは『心理学の危機』の中で「意味論」という語をたびたび用いており、それは例えば「意味論の起源論」(eine Ursprungstheorie der Semantik), 「蜜蜂の意味論」(Semantik der Bienen), 「社会生活の構成要因としての意味論」(Semantik als konstitutiver Faktor des Gemeinschaftslebens)などの言い回しで見いだせる。これらの脈絡から、ビューラーが描いていた「意味論」とは、この用語が一般に理解されているところの語義の分析を行う言語学の研究分野を指していないことは明らかである。彼の言う「意味論」とはむしろ行動主義的観点に発する一種の機能的概念であり、それは生物一般における広い意味での社会的行為を包括し、さらに人間による高度な表現行為や伝達行為を示す用語として理解しておく必要がある。そしてそれらの行為に社会的意味を持たせるのが「統御」の概念である。つまり、下等な単細胞生物から人間に至るあらゆる生物の社会的活動は、「相互統御」を成立させる意味論的装置としてのある種の体系的秩序の存在を前提にしており、各個体はその秩序に従って互いの行動から一定の意味論的情報を読み取ることができるのである。またさきほどの要約に示されたように、ビューラーは「意味論」の次元を3段階に分けているが、これは心理学における「三つの観点」²¹ (drei Aspekte) に対応させて「統御」のレベルも三つの段階に区別していることに由来する。つまり第1の次元とは、「記号」の「送り手」(Zeichengeber)と「受け手」(Zeichenempfänger)との間で行われる「相互統御」の「目標」(Richtpunkt)が、両者に共通の知覚状況の中に具体的に存在するときの意味論的行為であり、いわゆる「行動」(Benehmen)を外的知覚のレベルでとらえようとする行動主義的心理学的観点から見た次元である。これに対して第2の意味論的次元では、内的知覚が「相互統御」に関与してくる。つまりここでは外的知覚のレベル

から見た「相互統御」の行動に加えて、個体の独自の欲求や気持ちが顧慮されなければならないために、内面の表現を理論の中心に位置付けるヴァント流の体験心理学の考え方が導入されることになる。そして最も高度な第3の意味論的次元は、意図される「統御の目標」が何らかの形で「記号」の「送り手」と「受け手」に共通の知覚領域を超越している (transzendieren) ような場合であり、言い替えると、それはある種の高度な秩序が媒介装置として働くことによって交流が実現される次元である。また「記号」が対象を叙述することによって成立するこの意味論的次元は、人間の言語にのみ特有である。ビューラーは「記号」におけるこのような働きを、「精神科学的心理学」(die geisteswissenschaftliche Psychologie)で提唱される「客観的精神」(objektiver Geist)の概念に結び付けて解釈しようとしており、したがってこの場合の「客観的精神」とは、ある社会の成員間で「客観的形成体」(objektives Gebilde)として通用しているある種の記号論的秩序に相当する。

3

ビューラーの名前は、概して主著である『言語理論』あるいはそこに示された「オルガノンモデル」との関連でのみ語られることが多いが、ここでは『言語理論』を彼の一連の著作の中に位置付けることによって、その内容の分析をより総合的な視点から行おうと思う。

『言語理論』は400ページ余りの大著であるが、その構成などからは著者ビューラーの細部に及ぶ綿密な配慮がうかがえる。ビューラーにはその他にも幾つかのまとまった著書があるが、それらのいずれにもこの『言語理論』に添えられているほどの詳しい序言はなく、しかもこの著を最後にまとまった業績が出版されていないなどの事情から、彼自身もやはりこの著を一つの大きな区切りと見なしていたようである。これらの事情を踏まえ

て判断すれば、言語をめぐる彼の関心と研究については、本稿の第1・2節で詳述した形成段階を経て、この著において一つの完結した成果に到達したと見ることができるだろう。しかしそのように完成度が高い分だけ、後で読む側にとっては容易には理解できない書物である。しかも至るところに医学用語を始めとする専門用語が散りばめられていることに示されるように、妻シャルロッテをして「百科全書家」²² (Enzyklopäde) などと言わしめたビューラーの博識がこの著の難解さをさらに増幅しているために、この著を正確に理解するにはその構造の把握と同時に、互いに依存し合って理論全体を支える礎石の役目を負うそれらの術語の意味を丹念に洗い直す配慮も必要になる。

『言語理論』の本文は序論と四つの章から成っているが、副題として添えられている「言語の叙述機能」に正確な意味で合致しているのは後半の三つの章のみである。恐らくビューラーは本来この著のために書き進めてきた部分である後半の三つの章に、後から二つの章、すなわち序論と第1章「言語研究の原理」(Die Prinzipien der Sprachforschung)を追加して1冊の書物にまとめ上げたのではないだろうか。したがってこの著は、内容的にも執筆経過からも三つの部分に分けて扱うのが分析の一つの手順であると思われる。具体的に見ていくと、「言語理論の昨日と今日」(Die Sprachtheorie gestern und heute)と題した序論で述べられるのは、言語理論の歴史的系譜の概観である。既に示したように、ビューラーは『心理学の危機』においても「行動心理学」・「体験心理学」・「精神科学的心理学」に代表される三つの異なる観点をそれぞれに生かす統一的な方向性を提唱したが、この序論からは、引き合いに出されるパウル、フッサール、ソシュール (Ferdinand de Saussure) という3人の当時の代表的言語学者の業績から抽出される独自の理念を統合する一般理論の構築を目指していることが分かる。したがって『言語理論』にはまず第一に、これらの先人の成果を整理し、まとめ上げることによって、研究の指標となる

べき体系を提起するという意味での史的な課題が託されている。また第1章「言語研究の原理」はタイトル通り言語研究の指針をまとめた章であるが、上記の序論が多分最も遅く全体の締めくくりとして執筆されたと思われるのに対して、この第1章に述べられる「公理論」(Axiomatik)は、本稿の前半で幾つか紹介したビューラーの長年にわたる言語への取り組みの集約であり、その中には実際に既に公表していた論文からそのまま転用している部分さえ見られる。そして副題に添えられた「言語の叙述の機能」は残りの三つの章で具体的に考察されているのであるが、本文全体の約5分の4に相当するこれら後半の三つの章の理解は、前半の二つの章で示された理論的企画の解釈と切り離して得ることはできない。

ここではこの書物全体を解釈する手掛かりとして、第1章で示される「公理論」の内容の検討から始めることにしよう。「公理論」は、A)「言語のオルガノンモデル」(das Organonmodell der Sprache), B)「言語の記号的性質」(die Zeichennatur der Sprache), C)「発話活動と言語所産、発話行為と言語形成体」(Sprechhandlung und Sprachwerk, Sprechakt und Sprachgebilde), D)「語と文、言語の型の象徴場の体系」(Wort und Satz. Das S-F-System vom Typus Sprache)の四つの「公理」(Axiom)から成っているが、これらが既に公表されていた諸論文を下敷きにしていることは第1, 2節で紹介した引用例などから明らかである。これらの各「公理」の概略は大体次の通りである。A)は、「言語記号」の機能を「送り手」(Sender)・「受け手」(Empfänger)・「事態」(Sachverhalt)の相互関係を示す構図の下に現象的に規定しようとする試みであり、そこで用いられる「オルガノンモデル」の図がそれ以来言語学の多くの書物や論文で頻繁に引用されるのは周知のところである。続くB)では、A)で表わされた言語の機能的多様性が今度は「記号」という一つの上位概念によって包摂されている。つまり「公理」A), B)は、一方が機能から見た「記号」の「多面性」(Mehrseitigkeit)を規定しているの

に対して、他方は「記号」の「多層性」(Mehrstufigkeit)の観点からその諸機能をとらえられるいわば表裏一体の関係にある。「公理」C)は、フンボルト(Wilhelm von Humboldt)が「エルゴン」(ergon)と「エネルゲイア」(energeia)、そしてソシュールが「ラング」(langue)と「パロール」(parole)の対立として表現した言語の現象形式の区分を再編成しようとする項目であり、言語研究の対象領域の画定と方法論の規定に重要な意味を持つ。最後の「公理」D)では、C)で説明された「言語形成体」の概念が、「記号」と「場」の相互作用に基づいて「叙述」の機能を生み出す二つの集合体系として特徴付けられる。

これら四つの「公理」は各々別個の項目として扱われているが、原理的にはそれらに共通して流れる記号論的思考によって一つの「公理論」を形成している。ただここで「公理論」の解釈と関連して注目しておくべき事実がある。それは「公理論」の構成上の問題である。実はビューラーが最初に「公理論」を発表したのは『カント研究』誌第38巻(1933)においてであるが、そのときの「公理論」の構成と内容は幾つかの点で上記『言語理論』第1章として組み入れられたものとは異なっている²³。その第1点は「公理論」の「公理」の順序変更である、つまり『カント研究』誌に発表された「公理論」では、「オルガノンモデル」の項が四つの「公理」の最後に位置付けられていること。第2点は、「公理」C)の言語の現象形式の「四場図式」(das Vierfelderschema)がソシュールの「ラング」と「パロール」の対立に準拠した「言語形成体」と「発話活動」の区別だけであったこと、第3点は、「記号」の「表出」(Ausdruck)の機能に関する記述により多くの紙面が費されていたこと、以上の3点が『言語理論』では特に意識的に変更されている部分である。そしてこれらの修正の理由を、ビューラーの言語理論あるいは記号論全体の特徴と彼の思考の推移に関する疑問を構造的に解き明かす手掛かりとして用いることができると思われる。

第1の問題点に関しては、「オルガノンモデル」を前面に出すことによって、「記号」の概念そのものよりも「記号」の意味論的機能の多様性の方を強く印象付ける効果が考えられる。したがってこれは言語を静的に見た一つの記号体系としてとらえるよりも、社会的交流の過程における「記号」の動的側面の方にビューラーの理論の重心が移ったことを裏付けている。そのように理解すると、「公理」C)に見られる修正もこの「オルガノンモデル」の前面化と切り離しては解釈できない。ここで導入された「発話行為」という術語はフッサールの「意味付与」²⁴ (Sinnverleihung) の概念を基礎にしており、「記号」の持つ概念的な意味が、特定の文脈や発話状況における話し手のある種の「行為」によって初めて厳密に規定される事情を述べたものである。もちろんここでビューラーは、最も初期の論文『諸事実と問題』で既に言及していた意識内容と「志向」の区別という思考分析での仮説を新たな形式で理論に加えようとしている。ただ、その当時と違って『言語理論』におけるビューラーの立場は、フッサールに基づく「行為」のとらえ方をより社会的な観点に置き換え、「記号」の「送り手」と「受け手」による「意味付与」と「意味理解」の共同過程という一種の「間主体的」(intersubjektiv)な「行為」としてこれを見る方向に変化している。このことは、その後発表した『言語理論の第3命題』²⁵ (1937)の中で、『言語理論』で用いた「言語行為」というフッサールの影響を強く感じさせる術語を、「発話交流」(Sprechverkehr)に再び変更していることによって一層明白である。

一方第3の修正点である「表出」をめぐる記述の削減は、『言語理論』の編集上の問題と、ビューラーにおける記号論の構想全般との関連から解釈できるのではないだろうか。ビューラーは『カント研究』誌第38巻に『言語学の公理論』を載せた同年の1933年に『表出理論』²⁶を出版し、そこで「表出」に関する業績を歴史的に考察することによってその体系を示そうと試みている。また『表出理論』、『言語理論』の序論での予告から判断す

るかぎり、言語の「表出」の機能に関しても、「叙述」面を扱った後に1冊の書物にまとめるつもりだったようである。このような事情から、『言語理論』の中の「公理論」で「表出」を詳しく述べた部分が削減されているのは、「叙述」と「表出」の問題を原則的に分けて扱うという基本方針に添った修正であった。しかしこのように機能別に論述をまとめようとしていることとともに、全体をビューラー独特の記号論的体系によって統一しようとしていることも認めなければならない。その点を最も良く表すのは、『表出理論』、『言語理論』の両著で何度も用いられる「共演意味論」²⁷ (Synsemantik) の概念であると思われる。

この術語は、マルティ (Anton Marty) の『一般文法と言語哲学の基礎のための研究』²⁸ (1908) の中で、それ自体で完結したものと見なすうる「自律意味論的」(autosemantisch) 表現と、他の表現手段によって補足される必要のある「共演意味論的」(synsemantisch) 表現とを区別するために用いられたことに遡る (例えば, „sitzt“ や „geht“ などの表現は共演意味論的, „Sitzender“ や „Gehender“ あるいは „er sitzt“ や „er geht“ などの表現は自律意味論的と解釈される)。ビューラーは、マルティが述べたこの原理に「記号」と「場」の概念を持ち込み、「表出」・「叙述」という意味論的機能を「記号」と「場」との共演として説明しようとしたのであった。例えば『言語理論』においては、「描写場」(Malfeld)・「指示場」(Zeigfeld)・「象徴場」(Symbolfeld) などの多彩な表現を用いて「記号」による「叙述」を説明しているが、この関係は、「記号」が「秩序記号」(Ordnungszeichen) から「徴証」(Anzeichen) に、そして機能が「叙述」から「表出」(Ausdruck) に置き換えられるだけで、原理的には『表出理論』でも同じである。

「今日表出理論に最も必要なものは、しっかりとした基礎を持つ共演意味論の拡張である。……表出の辞書において個々別々に編さんされた表

情術的現象 (mimisches Geschehen) の豊富な要因は、生活のどこで生み出されようとも、意味論的な場 (semantisches Umfeld) で用いられる。それらの観情学的 (pathognomisch)・観相学的 (physiognomisch) な価値はコンテキストに支えられており、記号論的に見れば、表出の徴候も音声言語の単語も、あるいは絵画における色彩の価値も同様である。」²⁹

このようにビューラーが論述を機能別に整理しようとしているのは、第1に『心理学の危機』の中で描かれた意味論における3段階の区別を理論的背景にしているためであることは言うまでもないが、そこへ更に、『言語理論』の序論の冒頭で述べているような言語学に「客観主義」(Objektivismus)と「主観主義」(Subjektivismus)の二つの流れを想定するビューラーの歴史観が加わっている³⁰。これらの流れを一つの著書にまとめたのがヴェントであったが、ビューラーの脳裡には、これらを一旦分離した上で再度統一する原理として「一般記号論」(allgemeine Sematologie)が描かれていたものと考えられる。要約すると、『言語学の公理論』と『言語理論』が人間の言語に基づくビューラーの記号論のモデル体系を示した著であるとするならば、『心理学の危機』はその思想的背景や理念を説明しようとするものであったが、『表出理論』においてはビューラーの記号論の持つ広がりが見られる。ここには人間の文化における普遍的現象としての演劇や表情術、あるいは「観情学」や「観相学」³¹を、記号論の視点から考察しようとした先駆的研究が提出されているからである。

ところで、現代のドイツ言語学とビューラーとの関係に眼を向けると、そこには一つの特徴的な構図が付随している。すなわち多くの場合、彼の理論は、言語内容研究に代表される旧世代の言語学に代わって登場したいわゆる新言語学の行き詰まりを、内部から克服しようとする動きである「言語实用論」や「テキスト言語学」などの理論的裏付けの役割を負って

きた。確かにこれらの分野との関連性は、ビューラーの業績を語る際の無視できない要素であり、既に言語学の古典的業績となり、しかも史的位置付けと他との連関が十分明確でない彼の理論にあっては、必然的にこのような形式を得るものであろう。しかし現代の細分化された言語学の個々の分野との関連からだけでは汲み尽くせない本来の意味を、現時点で求めようとするのは無駄であろうか。それを探る手始めとして、本稿では記号論の観点からビューラーの業績の全般的な整理と解釈を試みたのであるが、今後のビューラー研究は、近々出版されると聞く遺稿集も踏まえた記号論を中心とする一層包括的かつ詳細な分析によって、ビューラーの業績に恐らく十分な歴史的脈絡を与え、それがまた新しい現代的意義を加えることになるものと思われる。

注

- 1 K. Koerner, *Karl Bühlers Sprachtheorie und de Saussures Cours*, In: *Bühler-Studien*, Bd. 2, Frankfurt am Main 1984, S. 90.
- 2 K. Bühler, *Sprachtheorie, Die Darstellungsfunktion der Sprache*, Jena 1934, 2., ungekürzte Ausgabe mit Geleitwort von F. Kainz, Stuttgart 1965. 『言語理論 言語の叙述機能』上巻 脇阪豊他共訳 1983年 クロノス
- 3 Bühler, *Tatsachen und Probleme zu einer Psychologie der Denkvorgänge*, Teil 1. *Über Gedanken*, In: *Archiv für gesamte Psychologie IX* 1907, S. 297-365.
Teil 2. *Über Gedankenbeziehungen*, In: *Archiv für gesamte Psychologie XII* 1908, S. 1-23.
Teil 3. *Über Gedankenerinnerungen*, In: *Archiv für gesamte Psychologie XII* 1908, S. 24-92.
- 4 Bühler, *Über das Sprachverständnis vom Standpunkt der Normalpsychologie aus*, In: *Bericht über 3. Kongreß für experimentale Psychologie* 1909, S. 94-130.
- 5 Vgl. Bühler, *Tatsachen und Probleme*, Teil 1. *Über Gedanken*, S. 306 ff.
- 6 Vgl. *ibid.*, S. 334 ff.
- 7 Bühler, *Über das Sprachverständnis*, S. 94.
- 8 *Ibid.*, S. 119.

- 9 Vgl. K. O. Erdmann, *Die Bedeutung des Wortes*, Leipzig 1900, S. 78 ff.
- 10 「アハ体験」については既に『諸事実と問題』第二部「思考の脈絡」でも詳しく説明しているが、ここでは次のような説明が見られる。： „Das Ahaerlebnis war in allen meinen Fällen ein Beziehungserlebnis; es war ein alter, der Versuchsperson geläufiger Gedanke reproduziert worden und nun wurde eine bestimmte logische Beziehung zwischen diesem alten und dem zu verstehenden neuen Gedanken bewußt. Diese Beziehungen waren sehr mannigfaltig: Identität, Ähnlichkeit, Gegensatz, Subsumptionsverhältnis, Begründungsverhältnis und andere. Ihre Rolle kann kaum zweifelhaft sein: der neue Gedanke wird durch das Bewußtwerden einer bestimmten Beziehung zu einem anderen, schon bekannten, ideell eingeordnet, er erhält bildlich gesprochen seinen logischen Platz in der Gedankenwelt des Hörers und dadurch wird er verstanden.“ また、具体例として、ヴェーゲナー (Ph. Wegener) による „haben+Akkusativ“ の構成的意味的多様性 (例えば, „mein Freund hat... ein neues Haus/einen scharfen Sinn/viel Glück“ の指摘を挙げている。
- 11 Bühler, *Tatsachen und Probleme*, Teil 1. *Über Gedanken*, S. 342.
- 12 Vgl. Bühler, *Sprachtheorie*, S. 320ff.
- 13 Vgl. Bühler, *Die geistige Entwicklung des Kindes*, Jena 1918. またビュラーの経歴に関しては、Vgl. G. Lebzelter, *Karl Bühler-Leben und Werk*, In: *Die Uhren der Lebewesen und Fragmente aus dem Nachlaß*, Wien 1969, S. 9-64.
- 14 Bühler, *Kritische Musterung der neuern Theorien des Satzes*, In: *Indogermanisches Jahrbuch* 6, 1918, S. 5.
- 15 *ibid.*, S. 4.
- 16 Bühler, *Übdr das Sprachverständnis*, S. 94.
- 17 Bühler, *Über den Begriff der sprachlichen Darstellung*, In: *Psychologische Forschung* 3, 1923, S. 283.
- 18 *ibid.*, S. 294.
- 19 Bühler, *Die Symbolik der Sprache*, In: *Kant-Studien* 33, 1928, S. 407.
- 20 Bühler, *Die Krise der Psychologie*, Jena 1927, 3., unveränderte Auflage mit einem Geleitwort von H. Rohrer, Stuttgart 1965, S. 51 f.
- 21 Vgl. *ibid.*, S. 29 ff.
- 22 Ch. Bühler, *Die Wiener Psychologische Schule in der Emigration*, In: *Psychologische Rundschau* XVI, 1965, S. 195.
- 23 Bühler, *Die Axiomatik der Sprachwissenschaften*, In: *Kant-Studien* 38, 1933, S. 19-90, 2. durchgesehene Auflage mit Einleitung und Kommentar

von E. Ströker, Frankfurt am Main 1976. Dazu vgl. A. Eschbach, *Karl Böhlers Axiomatik und Axiomensystem der Zeichentheorie*, In: *Karl Böhlers Axiomatik, 50 Jahre Axiomatik der Sprachwissenschaften*, hrsg. von G. F. Graumann/Th. Herrmann, Frankfurt am Main 1984, S. 53 ff.

拙論『Karl Bühler の言語学とその視点』1984年 近畿大学教養部研究紀要 第15巻 第3号 109-125ページも参照。

- 24 Vgl. E. Husserl, *Logische Untersuchungen, Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis* II/1, Tübingen 1968, S. 37 ff.
エドムント・フッサール『論理学研究2』立松弘孝他共訳 1985年 みすず書房 47ページ以下。
- 25 Vgl. Bühler, *Der dritte Hauptsatz der Sprachtheorie, Anschauung und Begriff im Sprechverkehr*, In: *Rapports et Comptes Rendus du XI. Congrès International de Psychologie*, Paris 1937, S. 196 ff.
- 26 Bühler, *Ausdruckstheorie, das System an der Geschichte aufgezeigt*, Jena 1933, 2., unveränderte Auflage mit einem Geleitwort von A. Wellek, Stuttgart 1968.
- 27 Vgl. Bühler, *Sprachtheorie*, S. 165 ff.
- 28 Vgl. A. Marty, *Untersuchungen zur Grundlegung der allgemeinen Grammatik und Sprachphilosophie*, Halle 1908, S. 205 ff.
- 29 Bühler, *Ausdruckstheorie*, S. 213 f.
- 30 Vgl. Bühler, *Sprachtheorie*, S. 1 ff.
- 31 Vgl. Bühler, *Ausdruckstheorie*, S. 15 ff.

「観相学」(Physiognomik)と「観情学」(Pathognomik)の境界を完全に明確にするのは難しいが、ビューラー自身は、原則として形態論的手段によって把握可能な持続的要因を「観相学」、そして所定の形態論的構造の下で異なり得る行為的・表情的形態を「観情学」の領域として指定している。

Karl Bühler und Semiotik — eine entwicklungsgeschichtliche Auslegung seines Modells —

Kiyoshi Yamadori

Vor dem Zweiten Weltkrieg emigrierten aus wissenschaftlichen Gründen viel nennenswerte Wissenschaftler Deutschlands in die Vereinigten Staaten. Darunter gab es Karl Bühler (1879-1963). Vorher hatte sich Bühler als einer der berühmten Psychologen bestätigt, und sein Institut in Wien war ein Mekka in der Psychologie, wo sich aus verschiedenen Ländern der Welt junge Forscher gesammelt hatten. Durch die Emigration konnte er sich zwar von der Macht des Nationalsozialismus freilassen, aber an den nordamerikanischen Universitäten keinen ihm gebührenden Lehrstuhl mehr bekommen, und inzwischen fiel auch sein bisheriges Ansehen in der akademischen Welt fast in Vergessenheit. Heute, mehr als fünfzig Jahre nach der Erscheinung seines bekanntesten Werkes „Sprachtheorie“ (1934), finden Bühlers Überlegungen erst wieder Beachtung. Dieser Aufsatz zielt vor allem auf eine Auslegung seines theoretischen Modells, das wir durch eine Auseinandersetzung mit seinen wichtigen Werken erhalten.

Im ersten Abschnitt werden Bühlers zwei früheste Abhandlungen „Tatsachen und Probleme zu einer Psychologie der Denkvorgänge“ (1907-1908) und „Über das Sprachverständnis vom Standpunkt der Normalpsychologie aus“ (1909) aufgenommen und die Eigenschaften seiner sogenannten Denkpsychologie sowie einige Begriffe, die man in beiden Abhandlungen sehen kann, festgestellt. Dann überlegen wir uns ihre Bedeutung für seine späteren Arbeiten.

Die Aufgabe des zweiten Abschnittes ist es, die Entwicklungsschritte Bühlerschen semiotischen Modells herauszuarbeiten. Dazu benutzen wir die folgenden Aufsätze: „Kritische Musterung der neuern Theorien des Satzes“ (1919), „Über den Begriff der sprachlichen Darstellung“ (1923), „Die Symbolik der Sprache“ (1928) und „Die Krise der Psychologie“ (1927). Durch die Untersuchung dieser Werke wird es klar, daß sich das System von Bühlers Semiotik, die er selbst Sematologie nennt, seit etwa 1920 stufenweise entwickelt hat, und daß es in sogenannten drei Aspekten aus Benehmens-, Erlebnis- und geisteswissenschaftlicher Psychologie, die Bühler in der „Krise der Psychologie“ beschreibt, seinen theoretischen Hintergrund hat.

Im letzten Abschnitt dreht sich unsere Prüfung um „Die Sprachtheorie“, die von vielen als Bühlers einziger dauerhafter Beitrag angesehen wird. Aber hier lassen wir unseren Forschungsbereich nicht auf sie allein begrenzen, sondern schließen zugleich die anderen Werke, die daneben zu seinen wichtigsten Arbeiten gehören sollten, in Betrachtung ein. Dabei verdient es die erste Achtung, daß aus dem Vergleich zwischen zwei Formulierungen zur Axiomatik der Sprachwissenschaften, die Bühler damals in anderen Schriften veröffentlicht hat, einige Veränderungen festzustellen sind. Diese Untersuchung führt uns dann zur Erkenntnis von bestimmten Eigenschaften, die sich an die Struktur seiner gesamten semiotischen Forschungen anschließen: vor allem bemüht sich Bühler, die semiotischen Erscheinungen so dynamisch und umfassend wie möglich zu erfassen, und bringt sie nach seiner Ansicht, daß es in der Geschichte der Sprachwissenschaft zwei Strömungen gebe, die er als Objektivismus und Subjektivismus bezeichnet, zur Darstellung.